

郷土博物館・文学館だより

第19回 渋谷現代短歌募集 優秀作・佳作発表

渋谷には、明治時代から現在に至るまで、多くの文学者が住み、近代短歌の発展に貢献してきた雑誌『明星』や『アララギ』も渋谷で発行されました。当館では、こうした渋谷の文学風土を継承し、区民をはじめ多くの方々に渋谷を再発見していただく機会として、年に一度、「渋谷」を題材にした短歌を募集しています。

19回目を迎えた平成30年度は、30名から107首が寄せられました。今回は、國學院大学名誉教授の豊島秀範先生によって優秀作5首、佳作5首が選ばれました。作品を書写した色紙は、4月2日から14日にかけて、当館に特別展示されました。また、4月26日には当館の多目的室にて表彰式が行われました。

2019年度も、5月から文学講座「短歌を学ぼう」を当館で開講しています。また、12月からは第20回となる現代短歌募集を行う予定です。これからも「短歌の街・渋谷」を目指し、様々な活動をしてゆきますので、ご期待下さい。



表彰式に出席された入選者の皆さん

第十九回渋谷現代短歌く優秀作・佳作く

國學院大学名誉教授 豊島秀範選

〔優秀作〕

落成の渋谷区役所庁舎へと

煌きつつく青の洞窟 (赤野 貞子)

奥波は雨でも楽し日曜日

コーヒー片手に相合い傘で (岡本あやみ)

雨降りの道玄坂を歩きたく

ハチ公前で君を待った日 (土屋 春美)

街の音ネオンの光も包みこみ

神宮の森静かに眠る (中井真知子)

神宮の森へのばす散歩みち

冬薔薇咲く路地を通りて (吉田 恭子)

〔佳作〕

凍て空の代々木公園走りゆけば

内なる澁みゆるりと溶ける (市河原雅子)

片目閉ずパティオ宮益ホープくん

喫煙コーナー目の前にして (系井 修三)

暗渠より出でて流るる渋谷川

新装なりて行く人癒す (大熊 順三)

ひらひらと琥珀色なる公孫樹降る

黄昏時の代々木公園 (木原 昭子)

いもり川広尾の町をひっそりと

暗渠の中を流れ去り行く (前田 忠男)

北方探検家近藤重蔵と幻の渋谷の富士塚

7月、8月は富士山の登山シーズンですが、日本を代表する「富士山」のミニチュアが都内に100近くも造られたのをご存知でしょうか。

江戸時代に興った「富士講」は、富士山を神として信仰する民間信仰グループです。この人々によって造られたのが「富士塚」と呼ばれる富士山のミニチュアです。

都内現存最古は、渋谷区千駄ヶ谷に残る「千駄ヶ谷富士」です。寛政元年（1789）に造られたといわれます。渋谷区内に造られた富士塚はこれだけですが、恵比寿で活動していた富士講グループの「山正廣講」が、現在の目黒区別所坂付近に築造した「富士塚」があります。これを「目黒新富士」と言います。この塚は、江戸後期の幕臣で、北方探検家として知られる近藤重蔵と富士講徒により、今からちょうど200年前の文政2年（1819）に造られました。

この「富士塚」は高い崖の上に造られ、景色が良いことなどから江戸で評判になり、多くの人が訪れました。江戸時代に書かれた観光ガイドブックとも言える『遊歴雑記』には、「武州第一の景山というは中目黒別所坂の新富士」と書かれ、その素晴らしさを称えています。

しかし、この「富士塚」が原因となり事件がおこります。『藤岡屋日記』によれば、塚の土地は元々富士講徒の百姓が所有しており、その場所に「富士塚」を造ろうと考えます。しかし百姓は自分が築造するのは難しいと考え、旗本の近藤重蔵に土地を抱屋敷にしてもらい、富士塚を築造します。重蔵は塚の横に屋敷を造って移り住み、百姓は重蔵の屋敷前に店をつくり、そ

ばや酒を出し、大儲けします。しかし、重蔵との間で争いが起き、重蔵の長男である富蔵が百姓家族5人を切り殺してしまいます。

この事件により、富蔵は八丈島に流され、重蔵も大溝藩に預けられ、死ぬまで座敷牢で過ごすことになりました。

『藤岡屋日記』には、この事件の表題として、「近藤重蔵、渋谷新富士にて百姓切り殺し一件」と書かれています。塚のあった場所は、現在は渋谷区の区界を少し超えた目黒区にあたる場所です。事件当時は渋谷村の範囲に含まれていた可能性があり、渋谷の「富士塚」だったとも考えられます。

また、重蔵には松崎慊堂という学者の友人がおり、その慊堂が住んでいた場所が、当館が建つ辺りだと考えられ、当館には、松崎慊堂旧邸跡の説明板が立っています。

慊堂は、住まいに「石経山房」と名づけ、門人の育成と研究に励みました。また、近藤重蔵には、富蔵母の後妻とその子がおり、重蔵が江戸を去った後、慊堂が引き取り「石経山房」に住ませました。その後、重蔵の妻は慊堂の門人の医者と再婚し、息子は慊堂らの支援を受け、近藤家を再興しました。



目黒新富士 立齋広重「名所江戸百景」



三島由紀夫の青年期

三島由紀夫は本名を平岡公威（ひらおかきみだけ）といい、大正14年（1920）に東京市四谷区（現・新宿区四谷）に生まれました。昭和12年（1937）学習院中等科入学に伴い、渋谷区大山町（現・渋谷区松濤）に転居します。学習院では文芸部に入部し、7月に部誌『輔仁会（ほじんかい）雑誌』に「春草抄」が掲載されました。一年後には同誌に最初の短編小説「酸模（すかんぽ）」を発表します。幼少期に東京刑務所（現・市ヶ谷刑務所）を見た時の思い出を題材にした本作は、「三島由紀夫」という作家誕生以前の作品として注目できます。

16年5月、国語の担当講師であった清水文雄は、三島が持参した原稿「花ざかりの森」を読み「内に眠っていたものが、はげしく呼びさまされる」ほどの感動を覚えました。清水が自身の所属する文学雑誌『文藝文化』の編集会議に本作を提出したところ、出席者の満場一致で掲載が決まり、同年9月から4回に分けて連載されました。この時、初めて「三島由紀夫」のペンネームが用いられました。三島がまだ学生であったことや、三島が文学に傾倒することをよく思わない父・平岡梓への配慮があったとされます。

三島は19年に学習院高等科を卒業し、東京帝国大学法学部法律学科に入学しました。同年、短編集『花ざかりの森』が刊行され、一週間で4000部が売り切れました。しかし太平洋戦争の影響下で、執筆の継続が困難になっていきま

す。20年には三島にも召集令状が届きましたが、入隊検査時に肺結核を患っていると誤診され、徴兵を免れました。終戦後は復学し、22年に大学を卒業後、大蔵省事務官として勤務しながら執筆活動を続けました。

三島は日中の勤務と、帰宅後の執筆で消耗していきました。23年のある雨の日、渋谷駅のホームから線路に転落し、間一髪で這い上がるという危険に遭います。かねてより息子の二重生活に難色を示していた父親は、この一件ののち、息子が作家一本で身を立てていくことを許しました。同年9月に、三島は大蔵省を退職し、作家業に専念するようになります。

24年7月、三島は初の書き下ろし長編小説『仮面の告白』を上梓します。主人公〈私〉の半生を、性的志向の自覚や友人の妹との恋愛、自身の妹の死などの経験を交えて一人称でつづった本作は、作者の自伝的小説とされ、三島の代表作の一つとなりました。

同年8月、立ち退きのため、三島は家族と共に目黒区に転居しました。三島が渋谷で過ごした期間は決して長くはありませんが、この地で自身の才能を見出し、文壇にデビューするという大きな局面を迎えたといえるのではないのでしょうか。



『花ざかりの森』七丈書院
昭和19年（1944）

文化財紹介



「ミュージアム 1999（旧千葉常五郎邸）」

（昭和9年）

（平成30年5月10日 国登録有形文化財）

所在地 渋谷4-2-9

ミュージアム1999（旧千葉常五郎邸）は、平成三十年五月に、区内では七例目となる国登録有形文化財（建造物）に登録されました。

この建物は、先代が煙草商で財をなした千葉直五郎が、息子の常五郎と旧小城藩主の子孫である鍋島京子との結婚祝いに贈った住宅です。

昭和九年（一九三四）三月起工、同年八月に竣工した、鉄筋コンクリート造り、地上二階地下一階建てのスレート葺きで、設計者は黒川仁三、施工は竹中工務店東京支店が行いました。

建設当初は、地下は機械室・プール、一階は社長室・リビング・ダイニングルーム・厨房、二階は寝室・子供部屋、屋根裏は物置として使用し、家族構成は千葉常五郎夫妻と子供4人であったといわれています。

昭和二十六、七年頃には千葉氏はこの住宅を手放し、所有者が替わりますが、昭和五十六年に

レストランとして改修され、さらに平成十二年頃にも改修工事が施され、バルコニー等を室内化しています。また近年、地下にあった室内プールをワインセラーに改造しています。

本建築は、所有や用途の変更を繰り返したため、内装部分には建設当初からの変更が認められますが、外観は玄関ポーチをはじめ、外壁、塔屋部分など変化を持たせた当初の姿が残されており、昭和初期の高級住宅洋館建築の姿を現在に伝える数少ない建築といえます。

ほぼ同時期に建設された旧朝香宮邸（東京都庭園美術館、昭和八年竣工）は、フランス人建築家による、いわば正統的なアーチ・テコ様式と評価するのであれば、本建築は日本人の手によるアーチ・テコ様式を表現した、昭和初期における西洋の様式建築を受容した建物として、評価することができます。

【今後の展示予定】

◆企画展「新収蔵資料展」

8月18日（日）まで

◆企画展「文学に描かれた渋谷の風景

—明治から大正まで—

令和元年8月24日（土）

～10月14日（月・祝）

◆企画展「渋谷に残された伝説」（仮）

令和元年10月22日（火）

～令和2年1月13日（月・祝）

◆特別展「渋谷のオリンピックと丹下健三」

令和2年1月25日（土）～3月22日（日）

白根記念

渋谷区郷土博物館・文学館

SHIBUYA FOLK AND LITERARY SHIRANE MEMORIAL MUSEUM

開館時間 ◆ 11:00～17:00（入館は16:30まで）

休館日 ◆ 月曜日（休日の場合はその直後の平日）・年末年始

入館料 ◆ 一般:100円(80円) 小中学生:50円(40円)

※1日以内は10名以上の団体料金

※60歳以上の方 障害のある方と付き添いの方は無料

お問い合わせ ◆ 東京都渋谷区東4丁目9-1 TEL:03-3486-2791

郷土博物館・文学館だより vol.4 1

令和元年8月1日発行